

## 中文摘要

### \* 中文書名

《「霧社事件」與戰後的台灣/日本 性別·種族·記憶》

### \* 摘要

日治時期(1895-1945)是由殖民地台灣與日本帝國共同記錄的歷史。日治時期結束至今已70年以上,但這段歷史依舊常被文學、電影、漫畫等作為題材,被反覆地詮釋與再呈現(representation)。這段歷史當中,無論是在台灣或日本最常被作為創作題材的可說是發生於1930年10月的霧社事件。本書標題中的「霧社事件」指的是與霧社事件歷史相關的各種文本或創作。霧社事件相關文本隨著時代背景不同所呈現出來的內容、時代意義也不同。戰後在台灣或日本發行的相關文本中,霧社事件以何種型態呈現而出?從中可解讀出那些時代意義?本書將對以上問題進行探討。

本書分成兩部分共由五個章節組成。第I部:「霧社事件」的問題面向、第II部:在「蕃地」遇見「霧社事件」。分析時將焦點放在性別文化(gender)、種族(ethnicity)、記憶等議題,藉著探討不同時期的台灣或日本對於「霧社事件」的詮釋特色。本書主要目的在於透過爬梳「霧社事件」在台灣或日本戰後社會所呈現出的不同樣貌,進而探討在戰後的台灣或日本社會於不同時期如何面對「日治時期」或是「霧社事件」這段歷史。

序章..... 1

第I部 「霧社事件」という問題領域

第一章 ジェンダーから見た台湾原住民族の記憶と表象... 15

- 1 「彼」の霧社事件—想像の共同体の英雄物語 15
- 2 霧社事件における男女関係 22
- 3 彼女の霧社事件 27
- 4 台湾という想像の共同体と霧社事件の記憶 32

第二章 台湾原住民像の「声」として語ること..... 39

- 1 「声」に紡がれる出来事 39
- 2 銃後女性としての霧社事件関係者の「声」 44
- 3 戦後の霧社事件関係者女性の「声」—  
一言的な声から多元的声へ 49
- 4 台湾原住民族女性たちの「声」と「ガヤ」 54
- 5 原住民族女性となる道のり 59

第II部 「蕃地」で出会った「霧社事件」

第三章 植民地的ノスタルジアの政治性

坂口禰子の「蕃地」作品 .... 65

- 1 「蕃地作品」と女性 65
- 2 「移住蕃」たちの情欲：「ビッキの話」 67
- 3 入れ墨と「おなご」になること：  
「蕃地の女 ルピの話」 71

- 4 女性親密空間の中で交わされる性の言説：  
「蕃婦ロボウの話」 73

- 5 フィクションとノンフィクション 78
- 6 蕃地の記憶におけるアポリア：「蕃地との関わり」 81
- 7 植民地的ノスタルジアに内在するアポリア 87

第四章 植民地的「和解」の行方..... 91

- 1 「謝罪」を語る霧社事件 92
- 2 70年代の大学闘争を語る霧社事件 100
- 3 和解不可能なポスト植民地的関係 110

第五章 植民地支配の暴力への想像力とその射程：

「あまりに野蛮」 ..... 117

- 1 はじめに 117
- 2 死と過去の「喪失」／喜びと未来の「再生」 120
- 3 若夫婦の「性」・女性の身体と植民地である場所 124
- 4 子どもたちの死 130
- 5 おわりに一問われる「再生」の射程 133

付 録

台湾のなかの「日本」：「日本時代」のデッサン 141

あとがき 159

参考文献 163

初出一覧 169

## 序 章

### 1 語られる霧社事件

植民地台湾は、1895年から1945年までの50年間において植民地としての台湾とが帝国日本と共に紡ぎ上げた歴史を指すことばであるが、それが戦後から70年以上が経った今日においてもさまざまな形で表象され語られている。ここではいわゆる戦後、1945年以降に発表された植民地時代の台湾の歴史や人物などに関する諸表象を「植民地台湾」と表記する。また表題にある戦後の日本／台湾とは1945年以降の時空間を指している。

「植民地台湾」は植民地時代の台湾、大日本帝国（もしくは台湾総督府）と戦後といった、3つの大きな要素を包含する表現である。それに関する表象は台湾にとどまらず日本でも様々な形で世に出されている。この時点でまだ記憶に新しい映画だけを取り上げても、例えば戦後台湾からの引揚者を記録したドキュメンタリー映画『湾生回家』（監督・黄銘正、台湾映画 2015）、台湾原住民族の歴史事件を描いた『セデック・バレ』（監督：魏徳聖、原題：『賽德克・巴萊』台湾映画 2011）、馬志翔監督の『KANO

1931 海の向こうの甲子園』(原題:『KANO』2014 台湾映画) などがある。また日本でも酒井充子監督による台湾の日本語世代<sup>1</sup>を記録したドキュメンタリー映画『台湾人生』(日本映画 2009)と『台湾アイデンティティ』(日本映画 2013)などの作品がある。2011 年の東日本大震災への台湾からの高額な震災義援金の影響もあるためか、その後に上映される『台湾アイデンティティ』は「アンコール上映」や立ち席の観客が出るほどの盛況だった。

歴史的イベントへの意味は語られる中で派生するが、内容はそれが語られた各時代を反映するため、決して一枚岩にはならない。本書は植民地時代に台湾で起きた原住民族を中心とする歴史的イベント・霧社事件に焦点を当てながら、戦後に発表されたそれに関連する作品を分析の対象とする。終戦になって後も長く霧社事件は台湾や日本で小説もしくは映画、漫画などを通して語り継がれている。実際の歴史的イベントと区別するため、表題では「霧社事件」を括弧で表記することにする。事件は 80 年以上経っても様々なメディアによって表象されている。「霧社事件」は霧社事件に関連する諸表象のことである。

1930 年 10 月 27 日、霧社小学校で運動会開催の当日、台湾原住民族による大規模な反抗運動、霧社事件が発生した。そしてそれは、事件の収束や植民地時代の終了と共にピリオドを打っていないどころか、現在でも様々な媒体を通して語り継がれて、また

<sup>1</sup> 日本統治時代に台湾で日本語教育を受けた台湾人や原住民族のこと。

事件は 80 年以上が経った現在でも、様々な形で表象し続けられている。例えば先述した『セデック・バレ』は高い興行収入を見せたほか、関連書籍も同時に多く出版される<sup>2</sup>。事件そのものを記号とするならば、長い年月の中でその指示内容は時代の変遷に伴い多様な様相を呈しているのである。

事件の発生当初、反抗運動を鎮圧するため、警察隊のほか軍隊も出動した。当時、当局では「台湾島内の治安、朝鮮の独立運動、中国大陸での反日運動への波及、さらに日本の政界に与える波紋」などが危惧されたという<sup>3</sup>。反抗運動は結局、完全に鎮圧される。模範蕃社とされた原住民族たちによる反抗運動であったからこそ、それは植民地政策の破たんを意味したものと考えられる。その後、原住民族からなる高砂義勇隊にまつわる愛国美談が流布される中、霧社事件は帝国の権力を裏付けるものとなった。

<sup>2</sup> 例えば映画関連なら、『映画・バレ』(原題:『導演・巴萊』、台湾:遠流 2011)、『監督・バレ』(原題:『導演・巴萊』台湾:遠流 2011)、『夢・バレ』(原題:『夢想・巴萊』台湾:遠流 2011)、『漫画・バレ』(台湾:遠流 2011) などがある。また戦後引き揚げずに霧社に残った山下操子(中国語名:林香蘭)がその父親の一(中国語名:林光明)が口述したものを記録した『流轉家族』(台湾:遠流 2011)や、映画の中でセデック族の言語指導者である郭明正の『真相・バレ』(原題:『真相・巴萊』台湾:遠流 2011)、『再び真相・バレ』(原題:『又見真相』台湾:遠流 2012) などがある。映像作品に関連するものなら、ドキュメンタリー『セデック・バレの真実』(原題:『餘生 賽德克・巴萊』、監督:湯湘竹 2013) もある

<sup>3</sup> 『台湾新文学運動の展開 日本文学との接点』(河原功、研文出版 1997) p.107

1930 年を記念した大規模な原住民族抵抗運動いわゆる霧社事件についての台日双方の刊行物は 1996 年頃まででも公文書、研究書、史料、文学、漫画、ドラマなどあわせて 200 点以上にのぼる<sup>4</sup>。荊子馨（レオ・チン）はこの事件が多くの人に関心を惹いてきた理由をその歴史的要素に求めている。例えば解明されえない不審点（模範青年と評された花岡一郎、二郎の反抗動機、毒ガス使用の有無など）と、異なる政治的立場による多様な解釈の可能性、またありきたりの歴史記述には表出されえない関係者の複雑な感情などといったもの、それらすべては書き手の興味を誘う素材だという<sup>5</sup>。

## 2 「霧社事件」が語る

本書は戦後、日本で刊行された作品を中心に取り上げて分析する。戦後、日本で刊行された霧社事件に関連した文学とえば、

<sup>4</sup> 「霧社事件関連目録」（北村嘉恵、『教育史・比較教育論考』20、2010.6）は日本語、中国語、英語で公開された文献を中心に整理した目録で約 610 点を収録する。創作のほか関連研究や修士・博士論文も加えられている。

<sup>5</sup> 『成為日本人 植民地台湾與認同政治』（荊子馨、台湾：麦田人文 2006）p.191

台湾に在住した経験のある女性作家・坂口禰子による、1950 年代から 60 年代にかけての創作があるとはいえ、80 年代以降の出版量と比べれば、50 年代のこの時期に霧社事件はあまり注目されなかったように思われる。70 年代半ばに入ってから、霧社事件を題材にしたドキュメンタリー小説や歴史小説が次第に増えてきた。その執筆者は台湾からの引揚者、ジャーナリスト、ノンフィクション作家が多い。また執筆するにあたっての参考資料については、90 年代までは総督府の調査書や引揚者の手記、それに特定の地元関係者から採集した証言がよく使われた。70 年代半ば以降に刊行された霧社関連書籍の宣伝文句をざっと眺めてみると、「謎多い霧社事件の真相を開掘する長編...歴史の力学がもたらす悲劇を、著者は五年がかりで歴史小説化した！！」<sup>6</sup>、「歴史の狭間に葬り去られた、霧社事件の意味を世に問う」<sup>7</sup>、「台湾の「日本人みな殺し」霧社事件と、戦後の二・二八事件の真相をえぐる」<sup>8</sup>などといった文言が目につく。

霧社事件の後、反抗運動に参加した側は「敵蕃」、警察側の鎮圧活動に加担した側は「味方蕃」とされた。前者は事件後「川中島」（現清流部落）に移住させられた。戦後、長いあいだ、事件は「抗日」の言説に回収されたため、霧社事件記念公園が所在す

<sup>6</sup> 『セイダッカ・ダヤの叛乱（霧社事件）』（稲垣真美、講談社 1975）

<sup>7</sup> 『霧と炎 ドキュメント小説 霧社事件』（郡楠昭、三一書房 1992）

<sup>8</sup> 『霧社の光と闇 台湾の十字架と隠れ念仏』（内藤史郎、新人物往来社 1999）

る場所で生活する「味方蕃」の関係者たちの子孫は、長いあいだ沈黙を強いられてきた。が、歴史学にオーラル・ヒストリーの手法が採用されて、とくに90年代以降、「味方蕃」を含めた多様な証言や原住民族の社会慣習から事件を再解釈する動きが見られるようになった。

70年代、戴国輝たちは「『学術政治』（日本における台湾学の辺境化）と『現実の』政治（最も恵まれない人々の反乱）」という意図のもとで台湾学の研究を開始したが、その際、霧社事件が選択された理由は、事件自体に内包される「思考不可能性」とサバルターン的な性格にある、とレオ・チンは指摘している<sup>9</sup>。沈黙を強いられるサバルターンを代弁するため、事件発生から今日に至るまでの80年余の間に、200点以上の事件関連出版物が世に送り出された。なぜ代弁せずにはいられないのか。代弁の行為に付随した政治性を解説する作業は、各時代における霧社事件が持つ意味を解説する作業でもある。換言すれば、史実とは異なった次元、要するに史実から滲みだしてくる事件への想像、テキストの物語性への着目にこそ、新たな霧社事件関連作品の読みの可能性が含まれるのである。これは今日の台湾もしくは日本にとって、霧社事件または植民地台湾の歴史をどのように後世に伝えてゆくか、台湾社会では看過できないエスニシティの問題とどう向き

<sup>9</sup> レオ・チン「思考不可能性としての霧社事件」（『記憶する台湾 帝国との相剋』、吳密察等編、東京大学出版会2005）pp.115-116

合うのかにつながる問題でもあるだろう。未来へ持ってゆく記憶と過去においてゆく記憶、その取捨選択の過程に出てくる性別問題、政治問題、エスニシティ問題は、これから植民地時代の記憶を語るときの重要な課題となると思われる。それはつまり各時代に描かれた「霧社事件」が何を語っているかに耳を傾ける作業でもある。

### 3 本書の目的

本書は戦後に発表された霧社事件に関する諸表象を「霧社事件」と表記し、その多様な容貌を明らかにすることを狙いとするのであるが、分析にあたって、ジェンダー、エスニシティと記憶の視点を取り入れている。その理由は次の通りである。霧社事件記念公園は南投県にある。園内の真ん中にあるモーナ・ルーダオの銅像は、「抗日英雄、莫那魯道」と書いてある石台の上であり、また一番奥に「霧社山胞抗日起義記念碑」と書いてある記念碑が空に聳えている<sup>10</sup>。「抗日」、「英雄」などといった文句やモーナの銅像からも窺えるように、「霧社事件」はしばしば男性の歴史物語（his-story）に回収されたりナショナリズムと癒着して

<sup>10</sup> 「山胞」は現在ではすでに差別用語となっている。

ナショナル・ヒストリー  
国家の物語として語られたりする。他方、現在に至るまで霧社事件に関する歴史的研究や関連言説は膨大な量があり、それによって事件の輪郭がより明確に浮き彫りにされてきたことは否めない<sup>11</sup>。だが、たとえ同じ歴史事件を題材としても、文芸作品には歴史的言説にあまり見られない個々人の身体感覚や記憶のありようが描写されている。さらにつけ加えると、同時代に制作された警察側の資料を見ると、そこに反抗の理由として男女関係が多く取り上げられている。そのためジェンダー、エスニシティ、記憶などの観点は「霧社事件」の関連表象を分析する際、重要な観点となるものと思われる。

以上みてきたように、本書は分析の対象として文学のほか映画や口述歴史、史料なども取り上げており、次の構成からなっている。

## 第 I 部 「霧社事件」という問題領域

二部構成からなる本書の第 I 部は、日本と台湾の文献及び資料を取り上げながら、「霧社事件」がどのような問題性を内包して

<sup>11</sup> 近年、集大成として出版された『近代日本と台湾：霧社事件・植民地統治政策の研究』（春山明哲、藤原書店 2008）は代表的な一冊だといえよう。

いるかを考察することを目的とする。台湾及び日本の社会現象や時代背景を視野に入れつつ、「霧社事件」言説を考察するこの部は、霧社事件という問題領域を浮き彫りにするものであると同時に、文学テキストを中心に論じる第 II 部のための下敷きにもなる。

霧社事件にまつわる文学作品では、男性参加者を中心に描いたものは多いが、90年代前後から、歴史学ではオーラル・ヒストリーが重視されるようになり、関連著書が多く出版され、その内容もさらに多様化している。そのような動きの中で霧社事件体験者の女性たちの声も徐々に具象化されている<sup>12</sup>。現在、口述歴史なり歴史書なり霧社事件関係の出版物がある程度蓄積され、その中に女性には視座を据えた観点も少なくない。だが、それらの証言から、女性たちの事件との関わりや、感想などを探ろうとしたら、失望するかもしれない。大勢の犠牲となった、語りえない男性の代わりに歴史的記憶を残そうとするからなのか、女性による証言の多くは、女性としての自分の経験より、事件に参加した男性の経験を伝承する意思が強いように思われる。

第一章は「霧社事件」の記憶の語られ方に潜んでいる問題性を

<sup>12</sup> 例えば『風中緋櫻—霧社事件の真相及び花岡初子の物語』（鄧相陽 2000）や『オビンの伝言 タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件』（中村ふじゑ 2000）に、生き残った花岡二郎の元妻・高彩雲の証言が収録され、『台湾秘話 霧社反乱・民衆証言』（林えいだい 2002）に高彩雲のほか高彩鳳（彩雲の妹）の証言が収録されている。また『霧社事件 台湾人の集団記憶』（Yabu Sya・許世楷等編 2001）にも石麗玉の体験が記録されている。

史料、そして台湾と日本で刊行された創作などを取り上げて分析することを通して、事件に関する記憶の背後にある歴史的な影の部分の浮き彫りにする。

90年代以降、事件を語る「声」は多様化してくる。そこで看過できないのは「原住民女性」として語る主体性の問題とその「声」の上げ方いわばその政治性の問題である。第二章ではオーラル・ヒストリーで記録される「霧社事件」関連の証言をジェンダーとエスニシティの観点で分析したうえ、原住民族セデック族の社会規範である「ガヤ」から「原住民族」であり「女性」であることにあるディレンマを明らかにし、さらにアジアにおける台湾独自のフェミニズムの発展性についても触れている。

## 第Ⅱ部 「蕃地」で出会った「霧社事件」

第Ⅰ部は「霧社事件」という問題領域への試論だが、第Ⅱ部では日本現代文学を中心に分析する。「蕃地」ということばは現在では既に差別用語となっているが、台湾からの引揚げ者にとっては当時の生活用語の一つであったことも容易に想像できよう。戦前、台湾で文芸活動を行い、戦後、引揚げてからも台湾の「山」（台湾原住民族のこと）を題材に創作をし続けていた女性作家・坂口禰子（1914-2007）は、「蕃地」作家とも呼ばれていた。それ

は戦後、熊本に引き揚げてからすぐに「蕃地」に関する作品を次から次へと発表し、中には第44回（1960年下半）芥川賞受賞候補となった作品「蕃地」もあるからだ。坂口による蕃地作品は70年代までに集中している。女性作家の作品を中心に取り上げるこの部は坂口文学を主な分析対象とするが、現代の「霧社事件」文学として津島佑子の『あまりに野蛮な』も取り上げて分析する。

第三章では坂口の「蕃地作品」における「霧社事件」関係者の原住民族女性の描写、とくに「性」をめぐる表象を中心に分析し、その分析結果を踏まえたうえで、書き手である坂口の蕃地表象に潜在する政治性について考察を行う。これは戦後5,60年代の日本社会におけるコロニアル言説に潜在する政治性を解体することにつながる作業でもある。第四章は「霧社事件」を正面から描いた坂口の作品と男性作家である稲垣真美の作品を比較して分析する。世代、経験、立場などが異なる二人の作家がともに70年代前後に「和解」というモチーフを用いて霧社事件を語っている。そこで語られるコロニアル的「和解」の可能性の行方について考えるのがこの章の目的である。最後の第五章は2000年代、つまり今日の日本社会の「植民地台湾」との向き合い方を考える章である。具体的には津島佑子の『あまりに野蛮な』（講談社、2008）を取り上げるが、時間を交錯させながら書かれたこの長編作品には抽象的な描写が多い。文学性の高い手法で書かれたこの作品は、戦後日本社会の根底を流れる旧植民地台湾に対する欲望



装置の有り様を具象化するものでもあるように思われる。これらの分析を通して、帝国解体後の日本もしくは台湾の社会における戦後の歩みを考えていきたい。